

G. V. ローシー、日本初のバレエ教師 離日後の歩み (1918~1938)

上野 房子

[序]

G. V. ローシーこと Giovanni Vittorio Rosi (1867年10月18日生れ) は、1912年(大正元年)に東京・帝国劇場歌劇部の教師として来日、日本で初めてバレエを教えたイタリア人教師として知られている。本考は、ローシーの離日後の歩みを調査したものである(来日前の歩みは、舞踊学第14号参照)。主に、東京、ニューヨーク、ロサンジェルス の図書館でリサーチを行ない、さらに関連団体・個人に照会して情報を収集した。

[アメリカ入国]

1918年3月21日、コリア丸で横浜港を出航したローシー一家は、同年4月7日、カリフォルニア州サンフランシスコ港に入港した。移民局への申告によるとアメリカ滞在予定は6カ月、アメリカの市民権を取得する意思はなく¹⁾、短期滞在者としての入国だったが、メキシコに渡った時期を除き、少なくとも1938年まではアメリカで、主にバレエ教師として活動するのだった。

[ロサンジェルス]

カリフォルニア州ロサンジェルスに移住した時期は限定できないが、1918年秋には、同地に移ったようだ。バレエ“The Discovery of America by Christopher Columbus”の上演を企画した際の書類²⁾では、物語の時代設定が、コロンブスがアメリカ大陸を発見した1492年から1918年となっていることから、1918年のコロンブス記念日(10月12日)前後に、上演を企画したものだろう。

翌1919年3月2日には、生徒募集の広告がロサンジェルス・タイムズに掲載された(図1)。日時を断定できる、アメリカ入国後の最も初期の足跡である³⁾。同年9月には、California School of Artsのダンス部門の教師となる。同校は芸術専門学校で、他に音楽・演劇・美術部門があった。同ポストに就任後、新聞のインタビューに応じたローシーは、「私は愚かにも、彼ら(日本人の生徒達)を教化しようと試みた」「彼らは悲劇では喜劇的で、喜劇では真面目すぎた」と述べ、日本人に対する激しい反感を表明した⁴⁾。

1920年には、同校のダンス部門が新住所に転出し、まもなくRosi Ballet Schoolと改称された。ローシーが独立してバレエ学校を開校したのだろう。新聞広告では、ローシーが「イタリア人バレエ・マスター」「ミラノ・スカラ座出身」であ

ることに言及、バレエ教師として由緒正しい経歴を持っていることを強調した。その一方、ステージや映画用のダンス・ナンバーを指導することを謳い、ヨーロッパの伝統的なバレエ団とオペラ・ハウスに匹敵する劇場文化のないアメリカにあって、ローシーの指導対象がショービジネス志向のダンサー達だったことを推測させる⁵⁾。

その傾向を強めたのが、1921年7月の、Earle Wallaceの学校との合併だ。「比類のないバレエ学校の誕生」と宣伝で謳い、教授科目の中には社交ダンス系ダンスと共にバレエがあったが、正統派バレエ・ダンサーの育成より、“General Stage Preparation”、つまりショービジネス志向のダンサーを想定した学校であった。連名での新聞広告は、1921年10月初めまで掲載が続いた。

[メキシコ]

ウォレスとの合併解消後のローシーはメキシコに渡り、幾つかの学校・劇場に関わった。Universidad Nacional de México [メキシコ国立自治大学]のDepartamento de Bellas Artes y Universitario [芸術学部の附属機関]で教師・振付家として働き、Conservatorio Nacional de Música y Arte Dramático [国立音楽舞台芸術学院]でも仕事をした。Teatro Hidalgo [イダルゴ劇場]に教師・振付家として在籍した時期もある。当時のイダルゴ劇場専属のバレリーナの中には、ローシーの教え子もいたとの記録が残っている。1919年にはイタリア・オペラのメキシコ公演にディレクターとして同行したこともあるが、短期間の滞在だったのだろう⁶⁾。

[ロサンジェルス]

メキシコから帰国したローシーは、ロサンジェルスで、学校を再開した。1925年10月11日のロサンジェルス・タイムズには、ローシーのバレエ学校の開校を知らせる記事が掲載された⁷⁾。現在の中心街に近い、Kendis Apartmentsという建物内にあり、1989年夏に現地を訪問した時点では老朽化が進んでいたが、ローシーの入居当時には瀟洒な高級住宅であったと思われる。帝国劇場歌劇部員だった岸田辰弥とロサンジェルスで偶然出会ったのを機に、彼の近況が日本に伝わったのも、この時期のことだった⁸⁾。この場所で、おそらく1929年まで学校を維持した。1918年の渡米以来、最も長期にわたり同一の住所で学校を構え、新聞・雑

誌に登場する回数も比較的多く、ローシーのアメリカ生活の中で最も安定した時期となった。

が、1930年を過ぎると、学校の主宰者ではなく、第三者のダンス学校に雇われる機会が多くなる。1930年6月には、Lon Murray School for Stage Dancingと長期契約を結び⁹⁾、シティ・ディレクトリー1931年度版にも、同校の教師との記載がある。1932年7～8月には、ロサンジェルスで開講した短期講座Olympic Summer School of Danceで教え、シティ・ディレクトリー1934年度版では、Paul DinusとSam Mintzの学校の教師となっている。1935年度版以後にはローシーの記載はなく、ロサンジェルスから転出したようだ。

[シカゴ/ニューヨーク]

1934年以後の足跡は、断片的に東部の二都市に残っている。1934年8月には、シカゴのChicago Association of Dancing Mastersの集中講座に招かれ、バレエ部門で教えた¹⁰⁾。1938年夏には、ニューヨークのDonald Sawyerのダンス学校のバレエ部門の主任教師となった¹¹⁾。これが、今回の調査で判明した、ローシーの最後の足取りとなった。

[子孫探し]

ローシーと夫人Juliaの間には、息子Vittorio (1911年6月26日生れ) がいた。ヴィットリオあるいは彼の子孫がアメリカに在住している可能性を求めて、ニューヨーク大学の図書館が所蔵する全米の電話帳から計117名の「Rosi」を探し出し、全員に手紙あるいは電話で照会をした。その結果、39名の「Rosi」から回答を得たが、彼らの中からローシーの子孫を見付けることはできなかった。また、ニューヨーク州とカリフォルニア州では、ローシー本人、Julia、Vittorioの名前で死亡通知が提出された形跡はない。

[まとめ]

日本時代のローシーがそうであったように、アメリカでのローシーもまた、伝統的なバレエの歴史を持たない土地でバレエに携わった。アメリカ独自のバレエは、1930年代以後、主にニューヨーク、サンフランシスコ、シカゴといった大都市で胎動が始まり、その担い手となったのは、バレエ・リュース出身のロシア人ダンサー達とその教え子達だった。この胎動がアメリカのバレエ史の中心を為しているのに対し、ローシーが歩んだのは、ショービジネスの範疇に近い、すなわちアメリカのバレエの正史から外れた、文書の記録が不十分な分野であった。ハリウッドの映画産業に魅かれてロサンジェルスに移り住んだ時点で、ローシーが進む方向はバレエ正史から離れ、さらにロ

シア人のアメリカ進出によって、イタリア人ローシーは非主流派的存在になっていった。しかし、二重の制約を受けながらも、バレエ教師として歩み続けたのだった。

[註]

- 1) “List of Manifest of Alien Passengers for the United States Immigration Officer at Port of Arrival” [米国立公文書館所蔵] この文書によると、ローシーと夫人ジュリア、息子ヴィットリオの所持金の申告額は各500ドル、計1,500ドルに達し、1920年のアメリカの給与所得者の平均年収\$1,236 (Lois Gordon & Alan Gordon, American Chronicle, Six Decades in American Life 1920-1980による) を上回る現金を所持していた。
- 2) G. V. Rosi, “The Discovery of America by Christopher Columbus” [シュツットガルト公立図書館Württembergische Landesbibliothek所蔵] 文書中に公演地の記載はないが、前所有者Serge Leslieの蔵書目録では、文書の発行地はロサンジェルスとなっている。
- 3) 1918年以後のLos Angeles Timesの日曜版を閲覧した結果による。
- 4) Los Angeles Times (1919年10月19日) p. Ⅲ 29
- 5) 前項の記事の見出しには「映画のダンスに将来性を見出す」「(ロサンジェルスには) チャンスがある」とあり、ハリウッドの映画産業の存在が、近隣のロサンジェルスに移住してバレエを教えようとした一要因だったことを示唆する。
- 6) メキシコに関する情報は、Centro Nacional de Investigacion, Documentation e Information de la Danza [メキシコ国立ダンス調査資料情報センター] のVictor Carmona氏の調査による。
- 7) “the opening of the New Rosi School” との記載があるが、帰国後に新たに学校を開講したものか、既存の学校を移転したものかは断定できない。
- 8) 『帝劇』1927年7月号にローシーの手紙が掲載されたことは、下四郎『モダン・ダンス出航』のp.107～9に詳しい。
- 9) Los Angeles Times (1930年6月29日) p. Ⅲ 17
- 10) American Dancer (1934年6月号) p.21 [広告]
- 11) American Dancerの1938年6～8月号に、ローシーの名を記載した広告が掲載された。

Schools and Colleges

PROF. G. V. ROSI - Italian Professor of Dancing, with an interest in and too dancing. Classes and private lessons. Special classes and attention given to children. Wanted - Young ladies under special class training for stage. Ponet Square Hotel, 1249 S. GRAND AVE., corner Pico St. Phone, 10301; Fico 1981.

national reputation. The perfection of a classical characteristic